（様式）

令和3年度　学校評価　学校関係者評価書

学校名	三木市立豊地小学校

1 学校教育目標

志をもち　こころ豊かに　たくましく　学び続ける子の育成
～ 考える子　はげましあう子　つよい子～

2 本年度の重点目標

①確かな学力の育成　　●学びに向かう力，表現力，自己調整力，論理的思考力の向上。基礎学力の定着
②笑顔あふれる人間関係の構築　　❶自尊感情と自己有用感の育成

3 自己評価結果（達成状況）【 A：達成している　B：概ね達成している　C：あまり達成していない　D：達成していない 】

評価の観点	評価項目（取組内容）	取組（達成）の状況	評価	改善の方策
学習指導	○ 主体的・対話的な学びの創造 1 教科間の内容について相互の関連付けや横断を図り，カリキュラムマネジメントの視点から単元学習を設定し，児童につけたい力と学習目標を明確にした授業づくりをする。 2 学習規律・学習習慣の確立やタブレット端末を活用することで，学習意欲の向上を図り，基礎的・基本的な知識・技能を習得させる。 3 学びに向かう力や自己調整力の育成を図ることで，課題追求・解決に向けて，活動できる児童の育成に努める。 4 外国語科・外国語活動において，ALTと連携し，教材を工夫することで，児童が意欲的に取り組む授業づくりに努める。	1 全職員が低・高学年の部会に属し，児童が主体的・対話的に学べる授業づくりを目指して，1人1回の研究授業を行った。各部会で単元構想，指導計画等について事前に検討し，授業後の研修会で意見交流を行うことで，授業展開や指導方法について研修を深めた。互いの実践を見合い，その授業でどんな力をつけたいのか，そのためにどのような指導が効果的かについての教材研究に努め，工夫した授業づくりができた。その結果，ふりかえり活動で学んだことを実生活に活かしたいという児童が出てきている。 2 学期毎の学習目標に沿って，各学年の目標を設定し，月末には「学習ふりかえりカード」を活用してふりかえり活動をさせ，継続して取り組ませることで，学習規律の確立を図った。児童は，客観的に自己を見つめ，できていないところをどのように改善していけばよいかを考え，自分を高めようとしていた。また，朝学習で読書，プリント学習，スピーチ，タブレット端末を活用したドリル学習に取り組ませたり，学期に1回「家庭学習ふりかえり週間」を設定したりして，基礎学力の定着を図った。その結果，集中して学習に取り組む児童が増えてきたが，基礎・基本の定着には個人差がある。家庭学習においても自分から学習に向かおうとする姿勢はあるが，時間や内容には個人差がある。 3 児童が主体的に学習に向かい，話し合い活動が活性化するように，児童にとって魅力ある課題を設定し，意見交流の場の設定や方法を工夫した。タブレット端末を活用した意見交流やペアやグループでの話し合いでは，友だちの意見を参考にして自分の意見を深めようとする様子も見られた。真面目に学習に取り組む児童がほとんどではあるが，自ら積極的に課題を解決しようとする児童は少ない。 4 ALTと詳細な打ち合わせを行い，児童が英語を話すことに抵抗をもたず，楽しく学習に取り組めるようにした。季節の行事等を話題にすることで，文化の違いに関心をもち進んで学習することができた。休み時間にもALTと触れ合う姿も見られたが，積極的に外国語を使おうとするまでには至っていない。	B	1 教師が「主体的・対話的な学びの創造」を常に意識し，授業研究に取り組む。1人1回の公開の研究授業を継続し，互いに授業を見合い，積極的に意見交流して全体の授業力向上を目指す。 2 児童が自分の居場所を実感でき，互いに切磋琢磨できる学級・仲間づくりを目指す。一人一人の個性を大切にし，個に応じた指導を工夫する。必要に応じて個別指導を行い，認め励ましていくことで，前向きに学習に取り組む児童を育てる。また，個人の習熟度に合わせた課題を取り入れていく。 3 児童の実態を把握し，興味・関心ある課題を設定し，児童が進んで課題解決に向かうことができるような授業展開を工夫する。そのために，タブレット端末の有効活用も含め，話し合い活動を活性化させる指導展開について等の研修に取り組む。また，「みっきぃステップ」の活用を含め，自己調整力の育成に向けた取り組みを進めていく。 4 引き続きALTと詳細に打ち合わせを行い，英語に親しみながら学習できるような指導展開に努める。児童にとって英語が身近な言語になるように，行事等で英語に触れる機会を意図的に設定する。
人権・道徳教育	○ 人権を尊重し，よりよく生きようとする力を育む教育の推進 1 道徳教科書や人権学習資料，地域教材などを有効に活用し，道徳的判断力・心情・実践意欲をさらに高める授業づくりに取り組み，児童の成長を適切に評価することに努める。 2 全教育活動と道徳指導計画の関連を明確にし，授業や体験活動等で学んだことを日常生活に結びつけ，自他を大切にし，共に高め合う仲間づくりを推進する。 3 家庭・地域・学校が連携した人権・道徳学習や体験活動を取り入れ，自他の存在を認め，自己を鍛え高める教育活動の充実に努める。	1 道徳教科書や教育資料「ほほえみ」，兵庫県版道徳教育副読本等を用いて，学年間のつながりを意識しながら，発達段階に応じた年間指導計画を作成した。それをもとに児童の実態に応じた授業が展開できるように教材研究に努め，実生活に置き換えて考えることができるようにした。児童は，教材資料の主題について積極的に意見交流し，ふりかえりには学んだことを実生活へ生かそうとする意欲が感じられた。教師が児童のふりかえりに励ましのコメントを書くことで，児童の実践意欲を高めることにつながった。 2 道徳科の授業の充実を図るとともに，異年齢間交流や児童の発達段階に合った体験活動を実施した。日々の清掃活動や運動会等の行事を異年齢活動班（とよちっ子班）で取り組み，高学年がリーダーとなって下級生をまとめ，主体的に活動できた。下級生は上級生に憧れ，その行動をまねようとする姿が学級活動等において見られる。学年活動においては，低学年は老人クラブとの花植え，中学年は環境体験活動や福祉体験活動，高学年は口吉川小学校との交流（自然学校・修学旅行）を通して仲間づくりに取り組んだことで自己有用感を高めることができた。 3 10月に実施した親子人権学習では，教材研究をする際に，人権教育について職員研修を行い，人権尊重についての理解を深めた。家庭には，事前に授業のねらい等を知らせ，当日は児童と共に学習に参加していただいた。PTA人権講演会，親子人権学習，学級懇談会を通して，保護者と連携を図りながら自他を大切にすること，差別やいじめを許さない心情を育むことについて推進を図った。また，児童・保護者が「三木市差別をなくする市民運動」に取り組み，ともに人権感覚を高めることができた。	A	1 年間を通じて計画的に取り組み，児童が自分の生活と結びつけて考えることができるよう，体験活動と結びつけたり，授業の中での行動の変容に繋がるような気づきを大切にしたりする学習を展開する。そして，学校全体で成果と課題を共有し，児童の実態に合った魅力的な教材の開発や授業改善に取り組む。 2 道徳・人権教育の充実を図り，一人一人が活躍できる場面を意図的に設定し，有用感や達成感を得られるようにする。そして，共に認め合い助け合うことのよさに気づかせながら，仲間意識を育てる。 3 児童の豊かな心の育成のためには，学校だけではなく，家庭や地域と協力し合うことが大切である。引き続き，学校だよりやHP，学年通信等で学校や児童についての情報を積極的に発信し，家庭の理解と協力を得られるように努める。また，親子人権学習や「三木市差別をなくする市民運動」に親子で取り組み，人権意識を高める。
特別支援教育	○ 共に育ち高め合う児童の育成 1 特別な支援を必要とする児童の実態把握と，講師招聘研修の実施やSCやSSWの助言をもとに組織的な支援体制を確立する。 2 統合を視野に入れた小中連携教育を推進する。また，就学予定の園児がいることも園に出向き，情報収集に努める。 3 学年・学校を超えた交流及び協働学習の場を設定する。 4 個別の教育支援計画・個別の指導計画の充実を図り，支援を要する児童や保護者との連携を密にし，教育センターや医療機関など，関係機関と連携し，一人一人の教育のニーズに応じた組織的で，継続的かつ適切な教育的支援を行う。	1 子ども委員会を開いて，児童の実態把握を行い，指導・支援方法について検討し，全職員で共通理解を図った。また，必要に応じて，ケース会議を行い，支援方法・支援体制について検討した。今年度は，教育センターから講師を招聘し，支援が必要な児童の支援方法や児童理解の研修を行った。また，気になる児童の様子について，教育センターによる児童の行動観察をしていただき，発達相談及び助言していただくとともに，スクールカウンセラーによるカウンセリングを行い，児童の効果的な支援を行った。その結果，全児童が落ち着いた学校生活を送れている。 2 本年度は，就学前の園児と1年生，6年生と中学生との連携教育を計画していたが，新型コロナウィルス感染症拡大防止のため，計画していた交流は実施できなかった。就学予定の園児がいることも園に出向き，行動観察をするなど情報収集に努めた。 3 本年度は，三木中学校に進学する三樹小，平田小，口吉川小学校の児童との交流を計画していたが，新型コロナウィルス感染症拡大防止のため，実施できなかった。しかし，口吉川小学校とはリモート会議など，形を代えた交流を行った。 4 子ども委員会で児童の実態把握を行い，支援を要する児童については教育センターに児童の行動観察及び発達相談・助言をいただくことで，個別の支援計画・指導計画を作成し，指導・支援体制を充実させた。また，児童の様子について，面談や通信，連絡ノート等で情報交換をし，効果的な支援について家庭と連携しながら取り組んだことで心の充実を図れ，自己肯定感が育ってきている。その結果，不登校については出現していない。	A	1 引き続き，様々な職員が多学年に関わる小規模校のメリットを生かした実態把握と支援を行う。また，気になる事案があれば連携機関に児童の行動観察・発達相談を依頼し，助言をしていただくとともに特別支援教育を専門とする講師を招聘し，研修を積む。 2 引き続き，統合を視野に入れた小中連携教育を推進する。また，就学予定の園児がいることも園に出向き，情報収集に努める。 3 来年度は三木中学校に進学する平田小・三樹小学校の児童との交流を計画し，入学前に互いのことを知る機会を設定する。 4 特別支援教育コーディネーターを中心に支援を要する児童やその保護者と連絡・連携を密にし，教育センターや医療機関など，関係機関と連携した組織的な関わりを継続して行う。
生徒指導	○ 人間的なふれあいを核とした児童の育成 1 豊地っ子の三指標（挨拶・美化・時間）の習慣化及び月別生活目標の具現化により基本的な生活習慣の定着を図るとともに，インターネットやSNSの正しい使い方やつき合い方ができるよう，学校・家庭・地域が連携して取り組む。 2 感染症対策に配慮しながら，学級活動及び異年齢集団活動，全校活動等を通して，児童の自己実現を支援し，存在感・有用感を感じられる学校づくりに努めるとともに，リーダー育成のために全職員で関わっていく。 3 不登校の未然防止・早期発見・早期対応・支援体制を確立し，全職員が共通理解を図って対応するとともに，SC・市教委・子育て支援課との連携を継続する。 4 学校生活アンケート・インターネット使用アンケートを実施し，児童がかかえる課題やSNS・インターネットの使用状況やトラブルについて把握し，全職員で対応方策について共通理解を図る場を設定する。	1 豊地っ子の三指標の中でもあいさつに関しては，計画委員が中心となり「あいさつ運動」を企画し取り組むなど，あいさつの習慣化に取り組んだ。毎朝あいさつ回りをする計画委員の姿を見て，低学年にも広がるようになった。地域や家庭でのあいさつにおいては，家庭の協力を求め取り組みを継続中である。「とよちっ子インターネットルール7か条」をさらに意識できるように，タブレット端末の使い方の指導時や親子人権学習でとり上げるなど，機会があるたびにインターネットとの関わり方について注意喚起するとともに家庭への啓発を行った。 2 コロナ禍でも，感染症対策をしながら異年齢での集団活動を行った。とよちっ子班遊びでは，6年生が感染症対策に配慮しながら考えた遊びで楽しく遊べた。また，3学期には5年生にバトンタッチを行い，来年度のリーダーとしての意識も引き継げるようにした。 3 子ども委員会を開き，全児童の様子や気になる児童について全職員で共通理解し，迅速に支援体制に入れるようにした。委員会の開催を月曜日に設定し，スクールカウンセラーにも積極的に参加してもらい，気になる児童の観察方法やその対処法などのアドバイスをもらい，各機関へ繋ぐなど，解決に向けて対応した。「兵庫県いじめ防止基本方針」を再確認し，いじめの未然防止・早期発見・早期対応など，組織的に行う体制を確認して指導したことで，いじめ事案が発生することはなかった。 4 学校生活アンケート・インターネット使用アンケートを学期ごとに実施し，児童の実態を把握するとともに，課題に対しては担任を中心に聞き取りを行うなど，迅速な支援・指導を心がけた。全体では，朝会や終業式，各学年では学活や道徳の時間を使って，使用時間が長いときの弊害やトラブルへの対処について学習する機会を設けたことで，モラル意識が高まり，ネットを利用してのトラブル防止に努めることができた。	B	1 挨拶や場に応じた言葉遣いなどの定着に向け，学校・家庭・地域と連携して，児童が多様な人と話す場を設定し，みんなの前で話す機会を意図的に増やす取り組みを行う。 2 感染症対策に配慮しながら，委員会やクラブ活動等を児童が主体的に企画・運営する場とし，自己実現を支援しながら異年齢活動を充実させる。 3 不登校の未然防止・早期発見・早期対応・支援体制を確立し，全職員が共通理解を図って対応するとともに，スクールカウンセラー・市教委・子育て支援課との連携を継続する。また，年度初めに，職員で対応方策について共通理解する場をもつとともに，HPや通信等で本校の取組内容について児童，保護者への啓発を行う。 4 学校生活アンケート・インターネット使用アンケートをもとに，SNS・インターネットの使用状況やトラブルなどの本校の児童の課題を把握し，全職員で共通理解するとともに対応について検討する機会をもつ。
家庭・地域との連携	○ 安全・安心で，信頼される開かれた学校づくり 1 感染防止対策を講じ，実施時期や公開の仕方を工夫しながら，地域や保護者に学校行事を公開する。また，ICTを活用し，家庭等に向けて授業の成果を見せる場を作る。 2 公民館行事や地域行事等への参加，地域人材・地域資料の活用を通して，地域とのつながりを大切にした，特色ある教育活動を展開する。 3 学校だよりを地域に配布して教育活動を周知していくとともに，保護者へはメールシステムを活用し，情報を迅速に共有する。また，学校での様子を，学校HPにて随時発信したり，各学年通信にて伝えたりする。 4 月1回の安全点検，避難訓練や防犯・防災学習を実施し，防災教育，安全教育を推進する。引き渡し訓練も実際に起こった時を想定し，綿密な計画のもと行えるようにする。	1 学習発表会やマラソン大会，参観日などの行事を，公開時間の短縮や人数制限を行うなど感染防止対策を講じながら，積極的に実施し，児童や保護者から高評価であった。無観客開催となった運動会は，3方向から録画したものを迅速に配信したほか，一部の競技を後日のオープンスクールで再演した。授業においては，タブレット端末を活用し，学習の成果を朗読したりスライド製作したりしたものを家庭で見てもらうようにしたことで，日々の様子を保護者に発信することができた。 2 老人クラブの花植え，増田ふるさと公園での環境体験学習，地層の学習など，地域とのつながりを重視した授業を実施した。各学年ともゲストティーチャーを招聘し，プロに学ぶ授業を展開できた。児童は専門的な知識を得る機会を経て，より地域に親しみをもったり，仕事への興味が膨らんだりした。地域を活用した教育活動を行うことでキャリア教育の充実を図ることができた。一方で，地域主催の行事への参加は，中止になったり不参加を選択したりしたものが多く，休日における行事参加は少なかった。 3 行事や児童会活動，日ごろの授業の様子など，学校HPで随時発信できた。定期的に保護者へHP閲覧のお知らせを文書で配布したり，学年通信で掲載があることを知らせたりして，閲覧数が伸びた。各学年からも毎月末に1か月の児童の様子をまとめて発信し，どの学年の様子も知らせることができた。 4 1学期に数回，豪雨による引き渡しを実際に行うことになった。その都度，よりスムーズに，安全に引き渡しができるように意見を出し合い，改善していった。全職員が共通して改善策を認識したため安全な引き渡しを行うことができた。また，月に1回の校内の安全点検，火災，地震の避難訓練，警察官の方を呼んでの不審者対応訓練などを行い，児童および教職員の安全への意識や危機回避能力を高めることができた。	B	1 行事ごとに細かな反省会を実施し，課題を洗い出した。改善すべき点を確実に引き継ぎ，来年度も今年度と同様の形で，時間短縮をして充実した内容で実施する。また，タブレット端末を活用した授業に取り組み，日ごろの授業の様子を家庭に伝えられるような単元活動を実施する。 2 新しく開発した地域人材・資料もあったが，逆にコロナ禍により実施できないものもあった。ここ2年で実施できないものの中には授業価値が高いものもたくさんあるので，次年度以降に実施できるように人材一覧を取りまとめて残す。 3 4月から，保護者への通知文書がメールシステム「すぐーる」を使ってデジタル化される。「すぐーる」の活用を保護者に促すとともに，引き渡し訓練や健康観察なども「すぐーる」で行い，活用の幅を広げていく。また，今年度に続き，HPで授業内容を発信していく。地域行事は，徐々に増えてきているので積極的な参加の呼びかけを行う。 4 月に1回の校内の安全点検を引き続き継続して実施し，校内の安全に努める。また，避難訓練を学期に1度実施し，児童への防災教育を継続して行うとともに，教職員への研修等を行い防災教育への意識向上に努める。近年，増加しているゲリラ豪雨等の訓練も実施することで安全意識や危機回避能力を高める。

4 自己評価方法の適切さについての学校関係者評価

・ 自己評価は，概ね適切に評価されている。
・ 児童・保護者・職員用アンケートの集計結果が比較しやすいようにまとめられており，前年度との比較もわかりやすくまとめられている。
・ 令和2年度の学校関係者評価を踏まえ，前年度と対比できる資料となっており，より適切な評価に資するための改善がなされている。
・ 課題を分析し改善の方策がしっかり計画されている。
・ 取り組みや計画には，問題ない。
・ コロナ禍で，困難な面もあったと思うが，創意工夫ができている。
・ 保護者・児童の自由記述から課題については，改善をしてほしい。
・ 集計表中，学校評価アンケートの設問に関する表頭の4段階評価の定義の記載がなかったことから，次年度以降は同じ集計表の欄外において注記すべきである。

5 評価の観点ごとの学校関係者評価

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
○ 学習指導について，評価Bは，妥当である。 ・ 職員が「主体的・対話的な学びの創造」を常に意識され，授業研究に取り組まれている。1人1回の公開研究授業を継続し，互いに見合い，積極的に意見交流して全体の授業力の向上を目指してほしい。 ・ 児童が自分の居場所を実感でき，互いに切磋琢磨できる学級仲間づくりを目指している。また，一人一人の個性を大切にし，個に応じた指導を工夫されている。さらに，認め励ましていくことで，前向きに学習に取り組む児童を育てている。 ・ 一人一人の個性を大切にし，発言しやすいクラスづくりに取り組まれ，個に応じたきめ細かな学習指導がなされている。 ・ 個人の習熟度に合わせた課題を取り入れていただきたい。 ・ 各自の取り組み姿勢，積極性など，どうしても個人差が出てしまう。その差を埋める個々の指導を継続的にお願いしたい。 ・ 評価項目「児童を肯定的に評価し，学ぶ意欲を培う実践」では，教職員が肯定的（「十分達成」が9割）であるのに対して，保護者においては否定的な回答が1割を占めている。学校における学習意欲につながる場の創出が家庭における自主的な学習の取組に必ずしも結び付いていないと思われる。これらの認識の差を埋めていくことが，本年度の重点目標の一つであった「学びに向かう力」の定着につながるのではないかと考える。
○ 人権・道徳教育について，評価Aは，妥当である。 ・ 年間を通じて人権・道徳学習は，PTA，学校が連携し，児童への人権教育は十分できていると感じた。また，計画的に取り組み，児童が自分の生活と結びつけて考えることができるよう，体験活動と結びつけたり，授業の中での行動の変容に繋がるような気づきを大切にしたりする学習を展開されている。そして，学校全体で成果と課題を共有し，児童の実態に合った魅力的な教材の開発や授業改善に取り組もうとされている。 ・ とよちっ子班活動は，児童の助け合いはもちろん，高学年のリーダー意識や下級生が上級生を模倣することによりレベルアップに繋がっている。 ・ 自己肯定感を高め，自分も仲間も大切にできるよう指導していただいている。 ・ 評価項目「ともに認め合い高まり合う学級づくり」では少人数ながら保護者において，「あまりできていない」の回答がみられている。アンケートのみでは詳細な分析は困難であるが，今後において改善・努力の余地があるものと思われる。 ・ 親子人権学習や「三木市差別をなくする市民運動」に親子で取り組み人権意識を高めようとされている。 ・ 道徳授業の充実に向けた取組や，家庭と連携したPTA人権講演会，親子人権学習など，人権・同和教育に積極的に取り組まれており，保護者や児童のアンケート結果も高い評価を得ている。 ・ 児童の豊かな心の育成のためには，学校だけでなく，家庭や地域と協力し合うことが大切である。引き続き，学校だよりやHP，学年通信等で学校や児童についての情報を積極的に発信し，家庭の理解と協力が得られるよう努めてほしい。
○ 特別支援教育について，評価Aは，妥当である。 ・ 「わかば」「わかぎ」学級によるこれまでの取組の積み重ねや小規模校ならではの学年の垣根を越えた日常的な交流もあり，本校の特別支援教育は行き届いていると評価する。 ・ 子ども委員会の開催など，小規模校のメリットを活かし，実態把握をされていたのは評価できる。 ・ 様々な職員が多学年に関わる小規模校のメリットを生かした実態把握と支援を行っている。また，気になる事案があれば連携機関に児童の行動観察・発達相談を依頼し，助言をしていただくとともに特別支援教育を専門とする講師を招聘し，研修を積もうとされている。 ・ 特別な支援を必要とする児童は，他の児童にとっても「違いを認め合い，それを受け入れていく」人権の意識や感覚を高める上で非常に大きな存在であることから，引き続き，児童一人ひとりの個性を大切にしていただきたい。 ・ コロナ禍で，就学前児童，中学生との連携教育ができていないようなので，例年通りの取組を次年度もお願いしたい。 ・ 家庭・学校・行政等によって，児童への効果的な支援体制を整えていただけている。これからも研修を積み，適切な指導が行えるようにしてほしい。 ・ 子ども委員会により児童の実態把握，全職員の共通理解を図るとともに，スクールカウンセラーや教育センター，三木中学校との連携等，きめ細やかな取り組みがなされていることは大きく評価できる。
○ 生徒指導について，評価Bは，妥当である。 ・ コロナ禍が収束するまで，感染防止や児童への指導を引き続きお願いしたい。 ・ とよちっ子班（異年齢活動の班）や異学年との交流で，思いやりの心を育んでいる。これからも一人一人に寄り添った指導をお願いしたい。 ・ いじめ・不登校の未然防止等，迅速かつ適切な体制作りがなされている。 ・ 不登校の未然防止・早期発見・早期対応・支援体制を確立し，全職員が共通理解を図って対応するとともに，スクールカウンセラー，市教委，子育て支援課との連携を維持してほしい。また，年度初めには，職員で対応策について，例年通り共通理解する場をもつとともに児童・保護者への啓発をより一層行ってほしい。 ・ 児童のSNS，インターネットの使用が多くなってくると，長時間使用やトラブルが増える。そこで，注意喚起やルール作りなど家庭と連携した指導をお願いしたい。 ・ 家庭におけるゲームやインターネットの時間やルールの順守が課題である。「とよちっ子インターネット7か条」などを基に，引き続き学校とも連携して地道に取り組まなければならない。 ・ いまだに収束の兆しのみえない新型コロナウイルス禍において，児童が疲れやストレスを抱えていないか，また，学校生活を送る上で支障を来していないかなど，細やかな目配りによる指導をお願いしたい。
○ 家庭・地域について，評価Bは，妥当である。 ・ ホームページや学校通信で行事や授業内容を発信しているので学校の様子がよくわかる。また，地域に情報を発信し，地域とのつながりを大切に考えていると感じる。 ・ 安全点検により校内の安全に努め，児童への防災教育にも取り組み，家庭・地域と連携して児童の安全意識を高めていると感じた。 ・ コロナ禍で学校と地域との距離が遠くなりがちであるが，引き続き，地域への積極的な情報発信をお願いしたい。 ・ 地域行事は，徐々に増えてきているので積極的に参加を呼び掛けてほしい。 ・ 4月からもメールシステム「すぐーる」を使用することで，効率化，迅速性を発揮し，引き渡し訓練や健康観察などに活用の幅を広げてほしい。 ・ メールシステム「すぐーる」は情報伝達の迅速化や紙の削減などにおいて有用な手段であると考えるが，今後の本格運用を見据える中で，配信する時間帯には十分に留意願いたい。 ・ 近年増加しているゲリラ豪雨等の訓練を実施することで，安全意識や危機回避能力を高めようと取り組んでいる。1学期の豪雨による引き渡し実施が円滑に行われたことは，非常に良かった。 ・ 改善策の認識の共有化もできており，今後も継続してほしい。